

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）

研究期間：2010～2012

課題番号：22402005

研究課題名（和文）オーラルヒストリーを基礎とした日韓関係史の再構築に向けた学際的研究

研究課題名（英文） Interdisciplinary research for the reconstruction of Japan-Korea relations history that based on oral history

研究代表者

小針 進 (KOHARI SUSUMU)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40295548

研究成果の概要（和文）：本研究は韓国人識者に対するオーラルヒストリーを通じて、戦後の日韓関係史を学際的に再構築していこうとするものである。戦後の日韓関係を知る識者が次々に一線を退いており、その証言を記録する必要がある。その証言からは、政府による公式発表や公文書だけではわからない両国間の歴史や政策決定の一端を明らかにすることができた。また、韓国人一般の日本に対する眺めにみられるアンビバレンスな側面もわかった。

研究成果の概要（英文）：This research intends to carry out interdisciplinary reconstruction for the postwar history of Japan-Korea relations through the oral history to South Korean intellectuals. The intellectuals who know postwar Japan-Korea relations have retired a line one after another, and need to record the testimony. Their testimony taught us the history between the both countries which do not understand the official announcement or official document by the government, and a part of policy decision. We can also understand the ambivalent South Koreans emotion for Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2011年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2012年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	9,400,000	2,820,000	12,220,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究、地域研究

キーワード：オーラルヒストリー、日韓関係、韓国、北朝鮮、日本政治、ジャーナリズム、新聞社、駐日大使

1. 研究開始当初の背景

（1）本研究は、平成 19 年度まで実施した「口述記録と文書記録を基礎とした現代日韓関係史研究の再構築」（科学研究費補助金「基盤研究（C）」平成 18～19 年度、研究代表者：佐道明広、連携研究者：小針進）を継承し、さらに発展させようとするものであった。同研究では、地域研究者（朝鮮半島）、

日本政治外交（史）研究者、国際関係研究者を中心に、韓国の研究者の協力も得て、包括的な視点での資料収集を行い、近年ようやく方法論的に定着しつつあるオーラル・メソッドを用いて日韓関係に関する基礎的資料の収集を行うことを重要な課題としてきた。その際、軍事政権下における韓国民主化運動の中心的リーダーの一人である金泳三元大統領

領、軍事政権下で国会副議長まで務めた張聖萬氏のオーラルヒストリーを実施し、それぞれ記録を平成 20 年 3 月までに報告書として公刊した。

(2) 平成 20 年度は静岡県立大学と中京大学のそれぞれ研究費、平成 21 年度は静岡県立大学と日韓文化交流基金のそれぞれの研究費で、韓国要人のオーラルヒストリーを実施した。対象者は、権五琦氏（元副総理兼統一院長官、元東亜日報社長）、崔相龍氏（元駐日大使で、高麗大学名誉教授）であった。いずれも戦後日韓関係にかかわる重要な証言が多かっただけに、オーラルヒストリーとその記録化は未完結であった。

2. 研究の目的

(1) 戦後の日韓関係を知る識者が次々に一線を退いているなか、日韓関係に関与した韓国の識者を対象とするオーラルヒストリーを実施する。日韓関係史に関する基礎的資料を再構築し、学際的な検討を行うことを大きな目的としている。

(2) 日韓関係に関して、個々の断片的なものを除き、系統的に聞き取りを行うことによるオーラルヒストリーが実施された例は見当たらない。一般に、韓国人の日本に対する本音の「語り」は、建前の「書き言葉」とは大きく異なる。この点は、政府による公文書の調査だけでは不十分であり、オーラルヒストリーが果たす役割が大きい。

(3) 韓国人識者へのオーラルヒストリーを実施するなかで、東アジアの国際関係が日韓両国関係に与えた影響の解明である。韓国の場合、大統領の持つ権限が大きく、大統領個人のリーダーシップの在り方が政策内容やその後の展開に大きく影響している。中心となる大統領やその周辺、および関連する日本側カウンターパートの思想や行動の解明が必要とされる。

(4) 日韓両国の政治社会を比較する観点からも、両国の政治交流の動向を明らかにする必要がある。この点は日韓両国の民主化の比較、政治文化の比較という点からも重要な課題である。

(5) ただ単にインタビューを行うのではなく、オーラルヒストリーを受けて、その精度の高い記録化を行った。記録化は段階的に行うが、最終的にその草稿を報告書として刊行すること自体が本研究の目的でもある。

3. 研究の方法

(1) オーラル・メソッドは数カ月に1度のペースで行う研究方法である。対象者（話者）が韓国にいたため、研究グループ（研究代表者、連携研究者3名、研究協力者1名）と対象者の時間が合致する日程を1年に3回程度選んで韓国ソウルへ出張し、オーラルヒストリーを実施した。対象者が別の業務で訪日する場合、研究費の節約と効率につながるため、東京でもオーラルヒストリーを実施した。1日に行う時間は5時間程度であり、1度の出張で2日間連続して行った。

(2) 録音した音声記録は適正な保存をしながら、「録音起こし」の工程に移る。質の高い「録音起こし」の作成は、技術的に高度であるだけでなく、守秘義務を厳守する信頼性の高い業者に第一段階として依頼した。「録音起こし」原稿は、草稿としてメンバーによるファクトと用語の最低限のチェックを行ったのち、話者からの校閲を受けるという記録化作業を行った。

(3) オーラル・メソッドの研究方法を用いて、具体的には以下の4点に取り組んだ。①平成 23 年 3 月までに終えた権五琦・元韓国副総理兼統一院長官（元東亜日報社長）に対するオーラルヒストリーの証言の記録化作業を完了し報告書発行、②崔相龍・元駐日韓国大使（高麗大学名誉教授）に対するオーラルヒストリー実施（平成 22 年 6 月、10 月、12 月、平成 23 年 6 月、10 月、12 月、平成 24 年 11 月）とその証言記録の草稿チェック作業・報告書発行、③康仁徳・元韓国統一部長官に対するオーラルヒストリー実施（平成 22 年 8 月、10 月、11 月、平成 23 年 8 月、10 月、11 月、平成 24 年 6 月、12 月）とその記録化作業、④崔書勉・国際韓国研究院院長に対するオーラルヒストリー実施（平成 23 年 8 月、10 月、平成 24 年 1 月、6 月、12 月）とその記録化作業。

4. 研究成果

(1) 権五琦氏のオーラルヒストリーによって、代表的な日刊紙である東亜日報の記者あるいは幹部として眺めてきた、韓国言論界の歴史、その歴史への洞察力、その歴史を作ってきた当事者意識からくる問題意識を知ることができた。金泳三政権下の対北朝鮮政策の決定過程も垣間見ることができた。とくに、韓国ジャーナリストの世界観や政治家との距離、日韓国交樹立当時の韓国メディアの日本での取材手法、日本政治家の韓国観と韓国政治家の日本観、韓国の対北朝鮮政策の政策決定過程についての知見が得られた（375 頁に及ぶ報告書の冊子化を平成 24 年 7 月に完

了済み)。なお、権五琦氏は記録化作業の最中にあった平成23年11月にソウルの病院で逝去された。直前までは記録化作業に絡みやりとりを電話等で行っていたが、生前中に証言を得られたことは不幸中の幸いであり、本研究が急がれるものであることが再認識された。

(2) 崔相龍氏のオーラルヒストリーによって、韓国学界での約40年に及ぶ学者(高麗大教授など)として、留学生(東大大学院、1965~72年)、大使(2000~02年)、大学教授(法政大・成蹊大、2010~13年)という異なる立場で日本人とかわった韓国を代表する知日派知識人として、激動の韓国社会と日韓関係をどう見てきたのかが浮かび上がった。金大中政権期の駐日韓国大使としての「外交の日々」も明らかにすることができた。とくに、韓国知識人のアカデミックトレーニングの歩み、東京大学留学時代における丸山真男ら日本知識人との交流、韓国知識人と政治・行政との関係、日韓関係における駐日大使の役割、小淵首相ら日本の政治家とのやりとり、在任中の教科書問題や歴史認識問題への対処と本国および日本政府とのやりとりなどについての証言が得られた(245頁に及ぶ報告書の冊子化を平成25年3月に完了済み)。

(3) 康仁徳氏に対するオーラルヒストリーでは、解放前後の北朝鮮地域における社会状況(とくに教育)、朝鮮戦争前後の韓国社会の混乱(とくに思想動向)、韓国軍組織の状況、共産圏研究の起源、インテリジェンス面での日本との協力、4・19学生革命と5・16軍事クーデータをとりまく軍の反応、中央情報部の創設、北朝鮮工作員への対応、朴正熙大統領の政策決定スタイルなどに対する証言が得られた。

(4) 崔書勉氏に対するオーラルヒストリーでは、植民地時代の知識人の様子、解放後の独立運動家の状況、解放直後のカトリック教、張徳秀事件、張勉、金大中、盧基南大主教、マザー・キーオ聖心女子大理事長、田中耕太郎最高裁長官、国会図書館アジア・アフリカ課、東京・韓国研究院の設立経緯、金玉均研究、陸寅修・共和党議員(朴正熙前大統領義兄弟)、金山政英・元駐韓日本大使について証言が得られた。

(5) 4氏のオーラルヒストリーから共通してわかることは次の4点である。①戦後の日韓関係を知る韓国人識者から、政府による公式発表や公文書だけではわからない韓国側の証言を得ることができた、②東アジアの国際関係が日韓両国関係に与えた影響の一部を

解明すると同時に、韓国政府の政策決定の一端を明らかにすることができた、③日韓両国の政治社会を比較する観点から、両国の政治家や知識人との結びつきは強いものであったことを明らかにすることができた、④韓国人(とくに「日本語世代」)の、日本や日本人についての話し言葉と書き言葉、私的言語と公的言語との間にズレも感じられ、日本に対する眺めにみられるアンビバランсна性格の一端がわかった。

(6) 権五琦氏と崔相龍氏のオーラルヒストリー記録の報告書(冊子=【写真】を参照)はそれぞれ、主要大学・研究所・国や地方自治体の図書館・資料館、主要メディア、識者(研究者、政治家、文化人、ジャーナリスト)へ配布した。広範な研究者等が利用可能となることで、公共性の高い研究となった。



【写真】左が『権五琦オーラルヒストリー記録』、右が『崔相龍オーラルヒストリー記録』

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

① 小針進、「中韓関係20周年を迎えた韓国の対中認識をめぐって」、『国際情勢』、第83号、2013、1-10

② 小針進、「韓国大統領選挙をどう見たか」、『東亜』、第548号、2013、10-19

③ 佐道明広、「日本の防衛体制は領土有事に機能するか」、『中央公論』、第128巻2号、2012、118-126

④ 小針進、「第3期を迎えた日韓間の『慰安婦』問題をどう考えるべきか」、『国際情勢』、第82号、2012、1-13

⑤ 小針進、「日本マスメディアの韓国報道の変遷と日本人の対韓意識」、『東洋文化研究』、第13号、2011、549-574

⑥ 室岡鉄夫、「韓国軍の国際平和協力活動-湾岸戦争から国連PKO参加法の成立まで」、『防衛研究所紀要』第13巻第2号、2011、25-51

〔学会発表〕(計1件)

①小針進、「震災後の日韓関係と2012年の課題」、現代韓国朝鮮学会、第15回定例研究会、2012年1月21日、札幌学院大学

〔図書〕(計7件)

①小針進、サイトー印刷株式会社(科研費により冊子「報告書」を作成)、『崔相龍(元駐日本国大韓民国特命全権大使、高麗大学校名誉教授)オーラルヒストリー記録』、2013、245

②小針進(小此木政夫・河英善編)、慶應義塾大学出版会、「日韓関係とパブリック・ディプロマシー」(『日韓新時代と共生複合ネットワーク』)、2012、139-176(227)

③小針進、サイトー印刷株式会社(科研費により冊子「報告書」を作成)、『権五琦(元大韓民国副総理・統一院長官、東亜日報社長)オーラルヒストリー記録』、2012、375

④小針進(小倉紀蔵編)、有斐閣、「韓国の政治―歴代大統領と国民意識の変化」(『現代韓国を学ぶ』)、2012、151-184(343)

⑤小針進(小倉紀蔵編)、有斐閣、「日韓関係―戦後両国はどう眺め合ってきたか」(『現代韓国を学ぶ』)、2012、257-290(343)

⑥佐道明広、吉川弘文館、『<現代日本政治史5>「改革」政治の混迷 1989〜』、2012、260

⑦小針進(王敏編)、三和書籍、「現代韓国における日本研究の変遷と動向」(『国際日本学とは何か?東アジアの日本観』)、2010、341-358(412)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小針 進 (KOHARI SUSUMU)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号: 40295548

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

佐道 明広 (SADO AKIHIRO)
中京大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 10303091

高安 雄一 (TAKAYASU YUICHI)
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号: 20463820

山地 久美子 (YAMAJI KUMIKO)
関西学院大学・災害復興制度研究所・研究員
研究者番号: 20441420

(4) 研究協力者

室岡 鉄夫 (MUROOKA TETSUO)
防衛省・防衛研究所・図書館長
研究者番号: なし